

敦賀原発再び「活断層」

規制委専門家 評価書案示す 2号機廃炉も

日本原子力発電の敦賀原発2号機（福井県敦賀市）の原子炉直下を通る破砕帯（断層）について、原子力規制委員会の専門家チーム

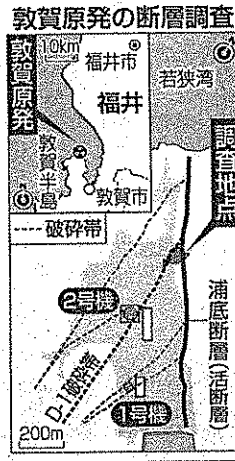
は19日、「将来活動する可能性のある断層等であると判断する」とする再評価書案を示しました。会合では部分的な修正の意見があっ

たものの、結論に異論は出ませんでした。修正した上で他の専門家による評価会合を行う予定です。昨年5月、規制委

は、専門家チームの活断層との評価書を了承しています。しかし、日本原電が同7月に「活断層にはあたらな

い」とする追加調査報告書を提出したため、専門家チームで再調査してきました。

問題になっているのは2号機直下を通る「D-1」と呼ばれる破砕帯。評価書案は、



しい規制基準の「将来活動する可能性のある断層等」とであると判断する」と結論づけています。

を否定する基準として「適切ではない」と指摘する箇所もありま

断層と同時に活動し、「直上の重要な施設に影響を与える恐れがある」と指摘されています。活断層の上には重要施設の建設が認められないため、2号機は廃炉の公算が大きくな

D-1破砕帯は、「新

評価書案には、日本原電が提出する地層のスケッチが何度も変更されるなど「活断層

の東200〜300メートルの至近距離にある第1級の浦底（うらそ）

については、後期更新世（12万〜13万年前）以降の活動が否定できない「活断層」と評価。さらに、このK断層がD-1破砕帯と二連の構造である可能性が否定できない」とし、